杵築市 総括会議

ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」第11弾杵築市編が6月14日、同市のきつき生涯学習館などで行われた。「1次産業」「観光」「新興力」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出されたミライキーワードをどのように実現し、杵築の活力を生みだすかについてさらに議論を深めた。各分科会のキーワードは、とにかく一歩前に踏み出して行動を起こそうという思いで共通しており、総括会議ではその行動の中身をどうするかが大きなポイントとなった。その中では、杵築には城下町、山の幸、海の幸など素晴らしい素材があり、それぞれがコラボレーションすることによって、城下町の空き地で海山の幸を売るアンテナショップができないかなど提起された。また、合併した旧市町村間に心の壁が残っているが、このようなコラボをすることでつながりが生まれ、壁を打ち破れるのではないかと指摘された。参加者はこの日生まれた新たなつながりを生かして杵築市の新しい未来をつくっていくことを誓い合った。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／杵築市　杵築市商工会
協賛／国立大学法人 大分大学　㈱大分銀行　㈱NTTドコモ　日本たばこ産業㈱熊本支店　大分農業文化公園

「叩かれてもやる」決意表明

「1次産業」分科会まとめ

前半は課題を中心に話し合い、後半は1次産業の活性化へ向け議論した。その中でまとまったキーワードは、「一歩前へ！」と「ストーリー性！」。「一歩前へ」とはこれから前に行こうということなく、既に1歩も2歩も前に出ている分科会メンバーが、他の1次農業の担い手と手を携えてやっていこうという意味。ミカン農家の森さんは、無が開発した生産の新手法をただ一人、「やってみないと分からない」と実際に取り入れてチャレンジしている。「ストーリー性」については、酪農の田畑さんが、子どもたちに搾乳体験などを通して牛乳ができるまでを教えている。体験を通じて、それまで牛乳が飲めなかった子どもが、飲めるようになったこともあったと紹介された。さらにそういう物語を持ったセットでツアーも開催している。この例のように、ストーリー性を持ったセット化がヒントになるのではないかと一致した。

“ミライキーワード”
一歩前へ！ストーリー性！

「観光」分科会まとめ

キーワードは「一歩踏み出す勇気」になった。1次産業分科会と似てはいるが、やはり前に踏み出す勇気が大事ではないかとの結論になった。杵築は着物で歩きたくなるような江戸時代の町並みが有名だが、そこにこだわるだけで観光客が来る時代は終わったのではないか、古いものを守るだけではなく、新しく生まれ変わっていくためにも小さなことから変わる努力が必要なのではと指摘された。具体的には、分科会メンバーの老舗の茶舗で体験型のイベントだったり、鯛茶漬けが有名な老舗では海外からの客に、いい思い出をつくってもらえるかを試行錯誤したりとなっての努力がなされている。城下町から離れた民宿ではランチを出すなど、今はやっていないがこれから取り組めるようなことがあるとの意見が出た。このような小さなことから踏み出せば、10～20年後は成果が表れて人の流れが変わるのではないかと議論がまとまった。

“ミライキーワード”
一歩踏み出す勇気

「新興力」分科会まとめ

新しく興す力というテーマで、何か新しいものを興せないか探っていき、まとめられたキーワードは「やっちみっかえ」という方言になった。杵築の魅力、課題を話し合った結果、実はできることや知らないことがたくさんあり、それがメンバーで共有できた。「やっちみっかえ」には、それをすぐやるぞという気持ちを込めている。同時に、若者が打たれても出る杭になるぞという決意も込めている。分科会メンバーは既に新しいアクションを起こしている人ばかり。共通していたのは地元に住み続けたいという強い思い。住み続けるためには、城下町にくずんある空き地を活用して活性化できないかと話し合った。その中で大田の産品を持ってきてそこで売れないかなど具体的な取り組みの提案がなされた。個性の強い杵築、山香、大田が合併した杵築市が、一つになれる可能性を見いだせる分科会の議論だった。

“ミライキーワード”
やっちみっかえ

心でつなぐ海、山、城

にこの2パターンがあるという話が出たんですね。こういうものは一人ではできない、野菜やミカンだけでなく体験イベントも宣伝する機会がない。わわわわと消費者の中間を埋める人が必要になるんで、その面で商売をしている方々とコラボしてつながっていけたらいいと考えています。

帆足　山香、大田のアンテナショップを城下町の空き地につくったらということですが、もう少しその考え方を教えてください。

下村　道の駅が杵築にはないという話から始まって、城下町の中に「町の駅」をつくろうという話が出ました。南北の歴史的な武家屋敷の間に通る谷町の空き地に点在すれば、観光地として魅力的になるだろうし、住民の生活にも便利になるでしょうし。大田、山香のアンテナショップができたらいいなと思っています。

帆足　合併後見えない壁があるとの話がありましたが、こういう取り組みで壁が壊せますか。

野田(浩輔・新興力分科会)　合併前の生活圏が豊後高田だったし、合併で飲み込まれたわけじゃないという時もあって、急に交わるのは無いところがありました。下村さんも今まで何度か頑張合わせたことはあって、怖そうな人だなと思っていたんですが話してみるとフランクで話盛的な意見はかり言ってくれました。今日こういう機会があって、自分の中は杵築だという意識が芽生えてきました。

主婦層集まるスペース

帆足　空き店舗の活用について女性の視点でアイデアがありますか。

今村　シャッターで店舗が閉まっているけど裏に住人がいるんですよ。そこを活用するのはすごくハードルが高くて、頑張っているお店もありますが、空き店舗が点々とあると町並みの連続性が途切れて人が流れてこない難しさがあると感じています。

帆足　アクセサリーやネイルのワークショップで空き店舗を活用できたらというお話もしていましたね。

今村　私の周りに趣味や資格を生かして頑張っている女性は、商店街など既存の街地の利便性や暮らしていく上での魅力が感じられないこと。買い物は車でロードサイド店に行く。城下町に住んでいるのに城下町の魅力を感じにくいという意見が多く出ました。魅力がないのに生活の中に織り交ぜていくかをもっと戦略的にやらないといけない、機能としても準備しないといけないのでは、どこでそれを展開するのか、口で言っても分かってもらえない現状の中で、やってみようじゃないかという話がありました。同交省の歴史的風致維持向上推進等調査事業に採択されて、今年度「やってみせようじゃないか」と言っています。ただ、勢いと思いとアイデアはあるが、一緒にやってくれる人がまだ見つかっていない現状でした。コラボレーションの話も出ていたのでこれからがすごく楽しみです。

新興力／若手リーダー
Ryosuke Shimomura
下村亮介 さん
杵築市、41歳。護則会・城下町地区まちづくり協議会長。下村時計店。伝統的文化と日々の生業が共存している大好きな杵築を守り、子どもに引き継ぎたい。

湯布院を超える可能性

帆足　大神さん。その辺でアドバイスがありますか。

大神　プラスアルファの産業というのはおっしゃる通りです。観光は余裕がないと行かない し、おもてなしもできません。1次産業という今回の分科会で感じたのは、しっかり杵築の1次産業を育成してもらいたいなと。持論なんですが、2次産業のことも3次産業のことも直接消費者の方に提供できる立場の1次産業の人が、1で初めて6次化だと。お客さまをいかに1次のところに引き込むかだと思います。生産者は忙しいので地域で収り組まないとできないんです。杵築は観光のポテンシャルとしては湯布院を反しくじゃないかと思っています。杵築が1次産業を巻き込んで大きな連携をすることで、より大きな観光地になると思っています。

帆足　城下町を中心に観光と1次産業がつながり、地域の個別にもつながるという考え方について佐藤さん いかがですか。

佐藤基　何でも観光になり得るという話がありましたが、弊社で温泉熱を使った発電事業を展開しています。地域の資源を使ってお金もうけをしようと始めたんですが、いざ始めてみるとびっくりしたのが、日本で最初だったので全国から問い合わせが来るんです。一番遠くは由布 県庁からも来られて。必ず泊まって帰るので、こんな取り組みでもお金が落ちてくれると。長崎の小浜温泉が事業化したら前年度から1500人は泊まる人が増加しました。新しいことを始めれば必ず食い付いてくれる人がいますんで、観光とコラボすることに可能性を秘めていると思っています。

シイタケを提供し連携

帆足　新しいものをつくる大切さと既に地元にあるものの大切さを中間的に考えていきたいと思っています。

中野(淳之・新興力分科会)　私も10年間杵築を離れていたので、帰ってきてあらためて素晴らしさに気付かせてもらえました。先ほどの紅茶ですが、恥ずかしい話で農家さんと知り合いになるまでは全く知りませんでした。「杵築の紅茶は有名ですね」と東京や大阪の方に言われて気付かされることも多いです。小学校の給食が出ましたが、市外の人に「あの椅を上って小学校に行くんですね。うちの子たちの小学校に通わせたい」と言われます。杵築だけ見ると人口は減っていますが、生まれ育っていなくても移住して来る人が増えています。まだまだ魅力を知らないことが多いので、アンテナショップや、小学校の人間がもっと杵築を知る場所ができればいいなと思っています。

帆足　守江酒の干瓢は魅力的な資源ですが、今ある魅力の再発見について佐々木さん(寿彦・観光分科会)いかがですか。

佐々木　住んでいる実感としては、人が減ってるとかネガティブなことばかり考えてて。三浦さんがよく言われている「まず城下町を良くして波及のように効果を広げて」というのをただ待ってるだけではだめなのかなと。連携の輪に入れてもらって、何か新しい魅力ができたらと思います。

帆足　連携を考えた時に八坂川の上流と下流の連携が必要だと思います。佐藤さん(孝生・1次産業分科会)は八坂川の上流域でコメを作っていますが、下流域の佐々木さんのかっぱ寺飯で在藤さんが作った物を売るという連携は取れませんか。

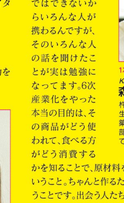
佐藤孝　お米はJAに出ているので、シイタケなど提供できたらと思います。

交流して地域循環生む

帆足　観光の商品開発で杵築にどんな魅力を感じますか。

園田　やはり杵築にしかないサンドイッチ型城下町や着物で歩けることです。お客さまから面白いコースや新しいコースないのとよく言われるので、杵築をご提案したいなと思います。体験できるのが一番です。着物を着て歩いて目で見て楽しんで、うれしのなど名物料理を楽しんで。その背景には1次産業の頑張りがあるということも今日感じました。

新興力／アドバイザー
Motoki Sato
佐藤基嘉 さん
大分市、28歳。豊後大野市出身。大分ベンチャーキャピタル投資事業部サブマネージャー。2008年大分銀行入行。農林水産加工品のブランド化に関心あり。



観光／アドバイザー
Kana Sonoda
園田花奈 さん
大分市、24歳。JT8largeが大分支店営業課。法人や団体の営業を担当し、旅行の添乗もする。熊本市出身。杵築市は城下町も魅力的で歩けるまち。

帆足　取材を通して感じているものを紹介してください。

豊嶋(悠・大分合同新聞整支局長)　今の話でいえば、空き地空き家の活用に由香やヤ川の1次産業の方が結びついてけるかと思いますが、新聞の記事を書く視点で見ると、それは可能なんじゃないかと感じました。進も手を挙げなければ実現できませんので、下村さんが頑張って音頭を取ってやっていただけたらと感じました。

下村　たまたま僕が会長をしているだけで、みんながいないと町づくりってできないと思うんですね。分科会で感動したのは、中野君が地元のコメや麦を使って生産者の顔が見えて、農家の人のために一生懸命やる気持ちになると言ったこと。町づくりも会社イズクも一緒で、一人じゃできないことなんで。県中国は工場を造り、物を作って雇用を生むことから6次産業だと言いますがそうじゃないと思うんです。商売人と1次産業の方がコラボし、人が交流して地域循環を生みだせば、必ずこの町は生き続けられると思ってます。僕はそのためにやっています。

風景を支える1次産業

帆足　6次産業化に取り組んでいる森さんはいかがですか。

森　6次産業化を今やっていて一番良かったのは、商品が売れてお金になったことじゃなくて、一人ではできないからいろんなんが携わるんですが、そのいろんな人の話を聞けたことが実は勉強になってます。6次産業化をやった本当の目的は、その商品がどう関われて、食べる方がどう消費するかを知ることで、原材料をもんちゃと作りましょうということ。もゃんと作るために出口を知りたいということです。出会うたんとが何かをすることが本当に意味のあることと感じています。何千万円も加工場に投資してラインを回していくのが精いっぱいで、とかは違うのでは。農家はしっかり作ってもらえる。本業を大事にすべきと常々思っています。

1次産業／若手リーダー
Kazuyuki Mori
森和之 さん
杵築市、36歳。森農園でミカン生産や梅加工を手掛ける。杵築相模（かんきつ）研究会青年部長。農家を育てる農家がして、地域の産業を支えたい。

帆足　6次産業化について姫野先生いかがですか。

姫野　皆さんが言っている通り、加工品を作って売るのではなく、人のつながりを生み出すものだと思います。暮らしの魅力をつくるには1次産業が元気でないとだめなんだとと。私たちも大事だと思う風景はほとんど1次産業で支えられてるんですね。新興力分科会で新しいものを作りだすのではなく、今ある資源をつなぎ合わせて再編集しようという話がありました。そこからのスタートが暮らしの魅力をつくることに必ずつながると思うんです。具体的には海と町と山とがコラボして、さらにストーリー性などが付加価値を付けること。愛媛の八幡浜に海岸線から頂上まで続くミカン畑があって、すごい風景なんですが、そこのミカンは1個500円で売られてます。その商品を買うことが素晴らしい風景を支えている、その地域に貢献できていると思わせるように消費者に伝えるのも付加価値につながると思います。うれしのも単なる鯛茶漬けではなく、お殿様がうれしいのう」と言って食べた物語と、後藤さんが和服を着て料理を出すことが、ストーリー性を持たせたプレゼンテーションになって価値が生じているんですね。付加価値が高めるということはいろんな要素を組み合わせて成るのかなと思います。

帆足　ストーリー性を持たせているんですか。

後藤　鯛茶漬けに限らず、全ての食べ物は事前に勉強しないといしくさが分からないんですよ。ストーリーが非常に大切。バスが5、6台やって来て、「10分トイレ休憩だから見ておいで」というのを入れたは一切杵築の魅力を感じずに帰ります。でも、「北台の大原郎から望めば志保屋の夜があって、南台には武家屋敷が同じ高さにあります。そこだけでも見れば杵築の観光の3割が割はできるから」と言えば、それだけでちょっとした思い出になるんです。どんなことでもストーリーは非常に大切だと感じています。

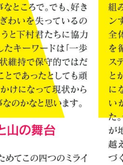
帆足　姫野先生と下村さんの話の中で循環という言葉が出ました。杵築を含む山東半島半島地域の世界農業遺産認定は、循環システムが評価されたものですが、どう活用するかご思見を。

松井(博照・1次産業分科会)　ため池とクヌギ林がつなぐ資源の循環システムが認定されたので、システム自体を商品などの付加価値に付けるにはストーリー性が必要になると思うんですね。農業遺産のブランド認証自体が難しくて、波及効果を検討していくところです。6次産業化の話では、ただ金をつぎこんで加工場を造るのが6次産業ではないんだと分かりました。ストーリー性をどう結び付けるか、行政だけで考えるのではなく、いろんな人と話すことの大切さを今日の会議で気付きました。

現状の少し上を目指す

帆足　大神さん。農業遺産の活用でアイデアは。

大神　事前に今日お話しする人の農地にうかがったのです。(田畑農場の写真を見せて)こんな高原があると知りませんでした。(佐藤幸さんの地区の田園風景を見せて)この風景一つをとっても魅力的な所が多いので、世界農業遺産に登録されたものとは直接関わりはありませんが、農業をいうキーワードの中で地域がしっかり活用していただければと思います。



1次産業／アドバイザー
Kenji Oga
大神健二 さん
日出町、45歳。JR鉄間興。JR九州ファーム大分代表取締役社長。1992年JR九州入社。事業を通して多くの人を幸せにできる人物になりたい。

姫野　世界農業遺産も重要文化的景観も認定に意義はあるのですが、それをきちんと地域のブランドにしていく活動を加えることで、初めて指定の意味があると思うんです。農業遺産にこだわるです。今見せてもらった風景写真を引き伸ばして城下町に貼り、貴い物をすることがこの風景を支えているんだと購買者に伝えることができれば、とっても尊いことですし、日本が抱えている課題を解決する手段として提示できるのではないでしょうか。城下町で売ることが、生産者にとってブランドになるならいいけない。じゃあ次は海と山で城下町はどうあるべきか真剣に考える必要があるし、連携の気持ちがとても重要だと思います。

総括コーディネーター
Yuka Himeno
姫野由香 さん
大分市、39歳。大分大学工学部助教。工学博士。専門は建築・都市計画。景観創造、景観維持を中心に、自主的な地域運営について研究している。

帆足　下村さんは城下町は生活空間でもあり、生活して仕事している姿が逆に観光資源になると話していましたが。

下村　観光で町を考えたことがあまりないんですね。ガキの頃から坂を上って学校に行って、藩校の門くぐって、今は文化財になって立ち入りできなくなっているんですけど、卒業するときもあっちの門からアーチを作って出てきた。国工の時間に大原郎などデッサンしたり、梅をちぎって食べたり。この時季になると甘い香りがするんですよ。で、おなかを満たしりして、文化財の中でそういう生活をしていることを逆に観光客に見てもらって生活感を出していくことが、金太郎あめのように普遍された観光地ではなく解析で他と違う場所をとり、生き残っていく形なんじゃないかと。それが本物の観光地になるんじゃないかなと思っています。

生活なければ魅力ない

帆足　姫野先生、その辺の考え方はいかがですか。

姫野　全くその通りだと思います。今までの話は城下町中心に聞こえるでしょうが、城下町も含めて生活や暮らしの魅力をつくるということは、山や海の資源をいかにこの地で共有できるかにかかっていると思うんですね。観光振興というと一時的に人をたくさん呼ぶことも大事ですが、持続可能な地域だとなるにはやっぱり暮らしがないと far 地域だと。その暮らしはその場だけでは成立しなくて、周辺地域と連携を取る、しかも連携の取り方がきちんとブランディングを一例はばえばいえ、(杵築の地酒)の紅茶梅酒もそうですね。地域の中でいろんな創現型の連携をして、杵築の城下を支えてきたいろんな産業のものがこの地にあるという構築の仕方が、住んでいる人にとっても訪れる人にとっても魅力になるんじゃないかなと思います。

帆足　観光という視点から空き店舗対策の話をどう見ますか。

三浦(孝典・観光分科会)　観光とは何でも結びけけることができるんです。他の分科会に連携して相乗りしていくのがわわわわれの仕事。コンテンツを外に宣伝していくのが私の仕事。かつ外の人たちの考えをフィードバックするのが私たちの仕事と思ってます。あくまでも主役は地元の人なんで、生活がなければ魅力がないんです。観光客なら集まるない観光地は早々に廃れていきます。そこを訪れる観光客もばかじゃないから分かるんです。地元の人に愛されていない観光客には愛されません。観光はなくなってもすぐには死なないブラスアルファの産業ですから、絶対なければならない1次産業とは違います。そういうもんだと覚悟して話を進めることが大事だと思ってます。観光振興と言って理論だけ並べる人と成功体験だけ述べる人がいますが、へのつっぱりもいらないもんぞ。いかに相乗りして様いていくかの話が重要だと思います。

湯布院を超える可能性

帆足　大神さん。その辺でアドバイスがありますか。

大神　プラスアルファの産業というのはおっしゃる通りです。観光は余裕がないと行かない し、おもてなしもできません。1次産業という今回の分科会で感じたのは、しっかり杵築の1次産業を育成してもらいたいなと。持論なんですが、2次産業のことも3次産業のことも直接消費者の方に提供できる立場の1次産業の人が、1で初めて6次化だと。お客さまをいかに1次のところに引き込むかだと思います。生産者は忙しいので地域で収り組まないとできないんです。杵築は観光のポテンシャルとしては湯布院を反しくじゃないかと思っています。杵築が1次産業を巻き込んで大きな連携をすることで、より大きな観光地になると思っています。

帆足　城下町を中心に観光と1次産業がつながり、地域の個別にもつながるという考え方について佐藤さん いかがですか。

佐藤基　何でも観光になり得るという話がありましたが、弊社で温泉熱を使った発電事業を展開しています。地域の資源を使ってお金もうけをしようと始めたんですが、いざ始めてみるとびっくりしたのが、日本で最初だったので全国から問い合わせが来るんです。一番遠くは由布 県庁からも来られて。必ず泊まって帰るので、こんな取り組みでもお金が落ちてくれると。長崎の小浜温泉が事業化したら前年度から1500人は泊まる人が増加しました。新しいことを始めれば必ず食い付いてくれる人がいますんで、観光とコラボすることに可能性を秘めていると思っています。

シイタケを提供し連携

帆足　新しいものをつくる大切さと既に地元にあるものの大切さを中間的に考えていきたいと思っています。

中野(淳之・新興力分科会)　私も10年間杵築を離れていたので、帰ってきてあらためて素晴らしさに気付かせてもらえました。先ほどの紅茶ですが、恥ずかしい話で農家さんと知り合いになるまでは全く知りませんでした。「杵築の紅茶は有名ですね」と東京や大阪の方に言われて気付かされることも多いです。小学校の給食が出ましたが、市外の人に「あの椅を上って小学校に行くんですね。うちの子たちの小学校に通わせたい」と言われます。杵築だけ見ると人口は減っていますが、生まれ育っていなくても移住して来る人が増えています。まだまだ魅力を知らないことが多いので、アンテナショップや、小学校の人間がもっと杵築を知る場所ができればいいなと思っています。

帆足　守江酒の干瓢は魅力的な資源ですが、今ある魅力の再発見について佐々木さん(寿彦・観光分科会)いかがですか。

佐々木　住んでいる実感としては、人が減ってるとかネガティブなことばかり考えてて。三浦さんがよく言われている「まず城下町を良くして波及のように効果を広げて」というのをただ待ってるだけではだめなのかなと。連携の輪に入れてもらって、何か新しい魅力ができたらと思います。

帆足　連携を考えた時に八坂川の上流と下流の連携が必要だと思います。佐藤さん(孝生・1次産業分科会)は八坂川の上流域でコメを作っていますが、下流域の佐々木さんのかっぱ寺飯で在藤さんが作った物を売るという連携は取れませんか。

佐藤孝　お米はJAに出ているので、シイタケなど提供できたらと思います。

交流して地域循環生む

帆足　観光の商品開発で杵築にどんな魅力を感じますか。

園田　やはり杵築にしかないサンドイッチ型城下町や着物で歩けることです。お客さまから面白いコースや新しいコースないのとよく言われるので、杵築をご提案したいなと思います。体験できるのが一番です。着物を着て歩いて目で見て楽しんで、うれしのなど名物料理を楽しんで。その背景には1次産業の頑張りがあるということも今日感じました。

豊嶋(悠・大分合同新聞整支局長)　今の話でいえば、空き地空き家の活用に由香やヤ川の1次産業の方が結びついてけるかと思いますが、新聞の記事を書く視点で見ると、それは可能なんじゃないかと感じました。進も手を挙げなければ実現できませんので、下村さんが頑張って音頭を取ってやっていただけたらと感じました。

下村　たまたま僕が会長をしているだけで、みんながいないと町づくりってできないと思うんですね。分科会で感動したのは、中野君が地元のコメや麦を使って生産者の顔が見えて、農家の人のために一生懸命やる気持ちになると言ったこと。町づくりも会社イズクも一緒で、一人じゃできないことなんで。県中国は工場を造り、物を作って雇用を生むことから6次産業だと言いますがそうじゃないと思うんです。商売人と1次産業の方がコラボし、人が交流して地域循環を生みだせば、必ずこの町は生き続けられると思ってます。僕はそのためにやっています。

風景を支える1次産業

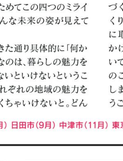
帆足　6次産業化に取り組んでいる森さんはいかがですか。

森　6次産業化を今やっていて一番良かったのは、商品が売れてお金になったことじゃなくて、一人ではできないからいろんなんが携わるんですが、そのいろんな人の話を聞けたことが実は勉強になってます。6次産業化をやった本当の目的は、その商品がどう関われて、食べる方がどう消費するかを知ることで、原材料をもゃんと作りましょうということ。ちゃんと作るために出口を知りたいということです。出会うたんとが何かをすることが本当に意味のあることと感じています。何千万円も加工場に投資してラインを回していくのが精いっぱいで、とかは違うのでは。農家はしっかり作ってもらえる。本業を大事にすべきと常々思っています。

1次産業／若手リーダー
Kazuyuki Mori
森和之 さん
杵築市、36歳。森農園でミカン生産や梅加工を手掛ける。杵築相模（かんきつ）研究会青年部長。農家を育てる農家がして、地域の産業を支えたい。

帆足　6次産業化について姫野先生いかがですか。

姫野　皆さんが言っている通り、加工品を作って売るのではなく、人のつながりを生み出すものだと思います。暮らしの魅力をつくるには1次産業が元気でないとだめなんだとと。私たちも大事だと思う風景はほとんど1次産業で支えられてるんですね。新興力分科会で新しいものを作りだすのではなく、今ある資源をつなぎ合わせて再編集しようという話がありました。そこからのスタートが暮らしの魅力をつくることに必ずつながると思うんです。具体的には海と町と山とがコラボして、さらにストーリー性などが付加価値を付けること。愛媛の八幡浜に海岸線から頂上まで続くミカン畑があって、すごい風景なんですが、そこのミカンは1個500円で売られてます。その商品を買うことが素晴らしい風景を支えている、その地域に貢献できていると思わせるように消費



総括コーディネーター
Tomonari Hoashi
帆足朋成
1991年入社。経済部、日田支社、政治部、文化部、文化科学部を経て報道部長。47歳。「やってみよう」赤茶を飲む作が美味く振り上げられたと実感した。

姫野　ずっとお話してきた通り具体的に「何かやってみようと」だと。大事なのは、暮らしの魅力をいかにつくるかを目指さないといけないということ。城下町も山も海も、それぞれの地域の魅力をいかにつくるかを考えなくちゃいけないと。どん

これまでのハピカム開催地／平成23年度 宇佐市（10月）津久見市（3月）　平成24年度 九重町（6月）日出町（9月）国東市（12月）日野市（3月）　平成25年度 竹田市（6月）日田市（9月）中津市（11月）東京（1月）姫島村（3月）平成26年度 杵築市（6月）